

<<東北魂>>を鼓舞する
電子新聞

発行所 株式会社遊無有

〒 207-0015
東京都東大和市中央 1-539-15
<https://tohoku-saiko.jp/>
e-mail:y.s.yumuyu@ozzio.jp

東北再興

Re-Create , TOHOKU!

2 0 2 5 年（令和 7 年）7 月 16 日 水曜日

無料

第158号

毎月発行

発行 2025 年（令和 7 年）7 月 16 日 水曜日

【当新聞発行責任者 兼編集長兼記者紹介】

【砂越 豊】

宮城県生まれ、71 歳の新人
歴史映像作家兼プロデュー
サー。3 作目の「古代製鉄の
埋もれた歴史を発掘した映像」の【奪われた古代鉄王国】は越前文を日
崎上映像は延期。乗けて縄文を日
の大型コナ禍を向けて縄文を日
いえて4作目は古代史・歴史を日
闘中。趣味は古物と東北から
文化研究。埋もれた東北を日
文掘すこととを標榜。
本を変えることを標榜。



じつに663日ぶりの大谷選手の二刀流復活 ほんとに長かった…でも以前よりパワフルになったので もう安心だ！さらなる活躍が期待できる！

待ちに待った「二刀流の大谷選手」

どんなに首を長くして待ったことだろう！
「投打の二刀流」が現実のものとなるまでほんとうに長かった。ひよっとしたら、もう二度と見られないのではないかとのかすかな不安も頭をよぎることもあったが、ようやく実現した。

ずっとおあずけ状態の犬のように、大谷投手のピッチング練習の姿は何度も見せられたが、本番はオールスターゲーム後だとかいうわさが飛び交っていて、まだ大分先まで待たされるのだろうと思っていた矢先、急遽十六日に登板が決まったが、正直なところその二ユースには驚いた。
後に判明したのだが、大谷投手本人から、真剣な本番さながらの練習をするのも、本番で投げるのも同じエネルギーだから、早く本番で投げさせて欲しいと直訴したから決まったという話も漏れ伝わってきた。

たしかに、実際の当番間隔よりも練習の間隔の方が短く、そうした練習をしながら、打者としても出場するというのは、心身ともに疲労するというものだ。筆者としては、とにかくおあずけ状態のワクワクドキドキの時間が短くて助かった。長引いたら心身ともに耐えがたかったのだ。

いよいよライブ観戦

リアル球場にはとても行けないが、せめてTVのライブ画面で投手として投げる姿を見たかった。

やつとその場面に遭遇して、とても言葉で言い表せない感激に浸った。

「指名打者としてだけの大谷選手」も MVP を取るほどの超一流なのだが、やはり超一流の大谷投手としての姿は格別だ。

そして、ついに、六月十六日のパドレス戦で二シーズンぶりに「一番ピッチャー」として先発出場した。わずか一回のみの登板で、物足りなかったが、最初は

これで我慢するしかない。投球内容は一回一失点の内容だったが、久しぶりに見た球筋はすごかった。

最速も161.2キロを記録するなど力強いピッチングで、以前よりパワフルな投球と感じた。

バッターとしては、三回の第二打席でタイムリーツーンベースを打ってみずからのバットで同点に追いつき、四回の第三打席でも連続のタイムリーで、リードを広げ、二刀流の復帰戦を勝利で飾った。

そうした投打の二刀流復活に満員のドジャーススタジアムのファンからは大きな歓声を送られた。

特に印象に残ったのは、マウンドを降りるとベンチに戻ることもなくすぐに一番バッターとして第一打席に立った姿だ。他のだれにもできない姿であった。

東北の代表として、大谷選手の今後の二刀流とますますの活躍に期待したい。（八面に追加写真あり！）



636 日ぶりの投球 NHK NEWS より



みずからのバットで同点に NHK NEWS より



試合後の取材対応 NHK NEWS より



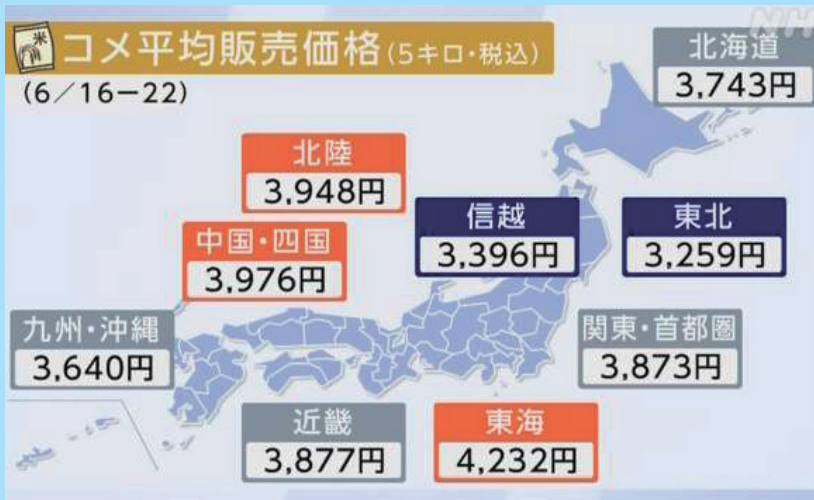
試合後に監督とハイタッチ NHK NEWS より

東北米農業 第二弾

発想を大転換しないと東北米農業は存続がむずかしいのではないかな？



安い米を求めて並ぶ人々・・・
The Ryukyu Shimpo Co., Ltd より



約 1000 円の地域格差がある・・・
NHK ニュース WEB より

半世紀にわたる東北米農業の弱体化

生産量 (千t)			消費量 (千t)		
1位	中国	144,500	1位	中国	147,500
2位	インド	104,800	2位	インド	98,097
3位	インドネシア	35,760	3位	インドネシア	38,500
4位	バングラデシュ	34,500	4位	バングラデシュ	35,200
5位	ベトナム	28,074	5位	ベトナム	22,100
6位	タイ	18,750	6位	フィリピン	13,200
7位	ミャンマー	12,600	7位	タイ	11,700
8位	フィリピン	11,915	8位	ミャンマー	10,550
9位	ブラジル	8,465	9位	日本	7,966
10位	日本	7,816	10位	ブラジル	7,900
11位	アメリカ	7,068	11位	ナイジェリア	6,400
12位	パキスタン	6,900	12位	韓国	4,450

米余りの国々からの米輸入増大はもう時間の問題！

世界の米生産量・消費量ランキング（農水省資料）
（日本のデータは農水省「平成26年度「食料需給表」より、その他の国・地域は米国農務省「PS&DJ」（10 November 2015、2014/15年の数値〈見込値を含む〉）より作成 ※注：数値は精米ベース）

米価格騒ぎで東北米農業生存策は出現しない
相も変わらずTVメディアなどからは米価格に関するニュースが頻繁に流され、一部の国民はそのニュースに煽られて「米パニック」に陥り、少しでも安い米が出るとそれを買いあさっているようだ。

へそ曲がりの筆者などは、米価格が高い地域に偏ったニュースではなく、米価格の低い地域も実際にあるのだから、そういうニュースでも報道したらいいと思うが、そうはならないようだ。実に、高いところと安いところでは約千円の違いがあるというのに取り上げないのだ。

こうしてみると、視聴率稼ぎのためにわざわざ無用のパニックを全国で引き起こして喜んでいるとしか思えない。いずれにしても、こうした騒ぎから東北の米農業の生き残り策は生まれてくることはまずないと断言しておこう。

ところで、今回号で「東北米農業 第二弾」を企画したのは、先月中旬、あるBS TVで、東北米農業に関して関係者が激論を戦わせていたのを見たことがきっかけである。

そこには元JA関係者や大規模米事業者などが参加していたが、目先の小さな見解の違い、手法の違いばかりに焦点を当てた近視眼的な議論ばかりでほんとうにうんざりした。

そんなことばかり議論して、ほんとうに東北の米農業は生き残れると思っているのかと逆に聞きたい気持ちになった。

そこで、こうした議論とは別次元で、東北米農業の生き残りについて考えてみる。そうせずに、いつまでも目先の議論ばかりしているとか、あるいは米価格高騰論に至った理由である。

東北米農業の数十年前先を見越した議論が必要
前号の東北米農業の記事でも指摘したが、この国で米の自給を達成したのが一九六七年、それを受けて「減反政策」を開始したのが一九七〇年である。

その大転換のときからすでに五十年以上を経過している。



アメリカの米づくりの現場・・・NHK より

守ってはくれないと覚悟を決めよう。
そして、「見捨てられるときは目の前に迫っている。そうした覚悟をしたらうで、やるべきことは山ほどある。」
これまで見て来なかった「課題群」が「一挙に『出現』するのだから、心して身構えるしかない！」
他国の米作りを徹底的に学ぶ機会をつくる
海外の米生産を真剣に本腰を入れて学習しよう。ずっと「守られてきたこの国の米づくり」を客観的に見つめ直す最大、最高の機会である。
この国の米づくりは、これまで一度も本格的に海外の米づくりを学んで来なかったのではないかと筆者は思っている。

単なるニュースとして知っているだけで、本物の現場を知らないのではないから、単なる見学者、観光者としての通り一遍の見学ではなく、少なくとも二年は滞在して学ぶシステムを民間で設けるのがいい。政府からの補助金はもらってもいいが、何から何まで任せるとこの企画は成功しないかもしれない。
あくまで米農家、東北の米農家中心で考えていくのだ。
例として、アメリカの大規模米づくりの現場が考えられる。
いま大変身中のベトナムの米づくりも、アメリカとの対比で学ぶべきである。ベトナムは「米づくりの先進国」なのだから、偏見なしに学ぶべきである。またベトナムの場合は、



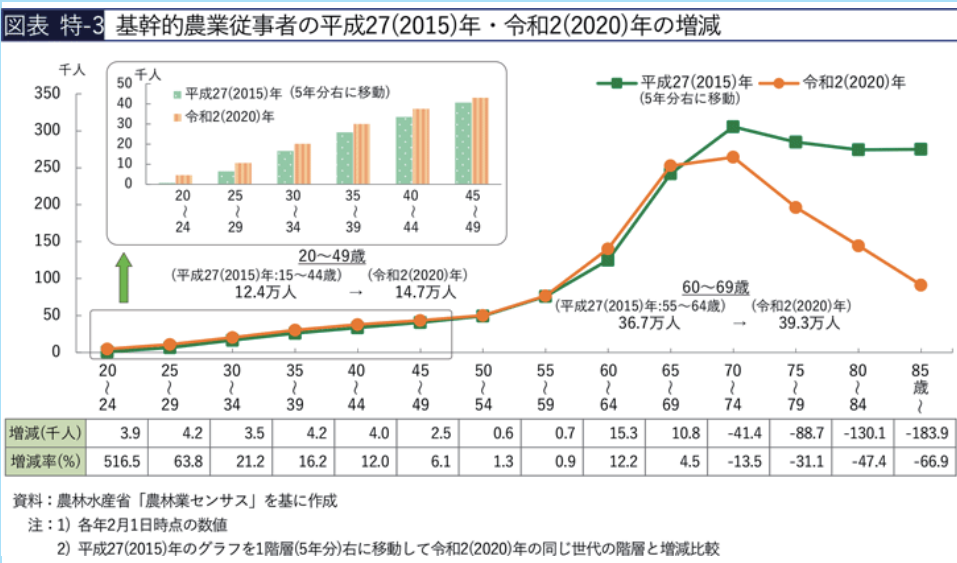
ベトナム、“米”の高品質化。100 万 ha の大規模水田開拓で「世界市場の獲得」目指す・・・Viet Nam News より

米の利用も学んで欲しい。ベトナムには米活用の長い歴史があるのだ。
「ご飯茶碗に白米」一辺倒の米利用ではない分野はぜひ見習うべきだと思う。
学んだら、そのまま受容するのではなく、日本に合った、東北に合った方法にアレンジして取り入れることを考えよう。
温暖化で二期作が現実化している
近年の温暖化のせいで、この日本でも二期作が現実化してきている。
この点でも、「二毛作先進国」に学ぶべきと思う。
現在は西日本の一部に限定される二期作だが、最近の温暖化をみると、東北でも二期作が可能になってくるのではないかと感じるのだ。

米の行程別コスト分析を徹底する
日本の米づくりは非常に丁寧で几帳面なことは認めるが、コストのことは二の次でやって来たように思えるのだ。
もしコストを大幅に引き下げようというのならば、海外の米づくりからも、米づくりの各工程のコストを徹底的に洗い出し、分析すべきであると考ええる。
ある意味で、米農家もメーカーなのだから、コスト意識を徹底するのは当然であり、そこから大幅なコストダウン策が導き出せる可能性は大きい。
前述のBSTVでの議論のなかでも、大規模農家は「田植え工程」を大きく見直して、コストダウンに成功



日本の水稻再生二期作・・・朝日新聞 DIJITAL より 6/27 より



日日本の農業従事者年齢別構成・・・農水省より



米の水耕栽培と 6 毛作を可能にする品種改良・・・SMARTNEWS より

ば、米の水耕栽培を行ってある事業者がいて、水田が不要で、農薬も不要、しかも二毛作どころか六毛作が可能だというのが、これを可能にしたのが、背丈が二十センチにも満たない新品種である。これにはさすがに筆者も驚いた。またこの手法が技術先進国日本の米づくりの有力な選択肢になりうると感じた。東北でもぜひチャレンジして欲しいと願う。
米づくりのイメージが一変するにちがいない。

多種多様な米づくり
今後は、さまざまな米づくり手法が開発されて行くことだろうが、筆者は米づくり手法は多様であっていいと考える。少数に絞ってやる必要はない。
従来の几帳面な手法をどんどん先鋭化して、超高級ブランド米の道があっても良いし、超低コストの米があってもいいのだと思う。消費者も多様化しているのだから当然なのだ。

農業に若者を！
農業従事者に若者を呼び込めという声は以前からあったが、若者が魅力的に思えなければ参入はしない。この記事にある米づくり新手法が浸透してきたあかつきには、若者がかなり多く参入する可能性がある。東北は、ただでさえ人口が減少しているのだから、新農法で若者を呼び込んで、一挙兩得となってもらいたいと切に願う。

2025 年（令和 7 年）7 月 16 日（水曜日）

第 158 号

https://tohoku-saiko.jp/

世界遺産以外の平泉の魅力

世界遺産だけが平泉ではない

平泉を訪れる観光客数も、世界遺産登録後は毎年二〇〇万人前後を推移している。コロナ禍で三年間一〇〇万人を切ったが、二〇二三年は二五三万人を超え、二〇二四年は一六三万人を超え、着実に回復してきている。

平泉で世界遺産に登録された文化遺産は五つ、中尊寺、毛越寺、観自在王院跡、無量光院跡、金鶏山である。平泉を訪れる人のお目当てはこれら五つであって、受け

入れる側もそれらを前面に出してPRを行い、現地での周遊ルートもこれら五つを巡るルートとなる。これら五つ以外には、高館義経堂と達谷窟が加わるかどうかくらいである。

これらは一日あれば巡れてしまうので、多くの観光客は朝平泉に来て、夕方には平泉を離れる。そして、見るべきものは見たというこ

とで、ほとんどの人はもう一度平泉に来ることはない、というのが現状である。

平泉で世界遺産に登録された五つの文化遺産、登録名の通り、奥州藤原氏が、戦乱が相次いだこの東北の地に浄土を創ろうとした証として今日まで残る、皆金色の金色堂が今も光り輝く中尊寺、平安時代当時の浄土庭園が残る毛越寺、それに隣接してやはり浄土庭園を有する観自在王院跡、沈む夕陽が阿弥陀如来の後光となつて輝く無量光院跡、そして平泉全体のランドマークである金鶏山、これら5つは確かに世界に誇るべき、素晴らしい文化遺産です。それは間違いない。しかし、ではそれだけが平泉なのかと言うと、それもまた違う。平泉にはもっといろいろな見るべき文化遺産がある。にもかかわらず、現状ではそれらが全て世界遺産に覆い隠されてしまっている。平泉イコール世界遺産という捉え方では、世界遺産以外の遺産が眼中になくなってしまふ。そのことに私は

常々疑問を持っていたのである。

その話を聞いたグルメな友人は、「黒毛和牛ステーキ屋なんかも黒毛和牛であることに頼り切ってる店が多くて、独自の価値観を訴求できる店がほとんどない」と言っていた。平泉を「黒毛和牛に頼り切ったステーキ屋」にしてはいけない。そう思つて、今準備しているガイドブックでは、世界遺産以外の平泉の文化遺産を紹介していくつもりである。

あまりに知られていない「附鎮守社跡」

世界遺産以外の遺産がまつたく知られていない例として、毛越寺と中尊寺を挙げてみたい。まず毛越寺である。世界遺産に登録される以前から毛越寺は、国の特別史跡と特別名勝に二重に指定されている。

「特別史跡」と「特別名勝」について簡単に説明しておく、日本の文化財保護においては、文化財は2段階で指定・保護されている。その最も顕著な例が「重要文化財」と「国宝」で、古文書や仏像、建造物などの有形文化財のうちで重要なものが重要文化財に指定され、そのうち「たぐいしない国民の宝たるもの」が「国宝」に指定されている。

同様に、貝塚、古墳、都城跡、城跡、旧宅といったいわゆる遺跡のうちで重要なものが「史跡」に指定され、そのうち「学術上の価値が特

に高く、我が国文化の象徴たるもの」が「特別史跡」に指定される。庭園、橋梁、峡谷、海浜、山岳といった名勝地のうちで重要なものが「名勝」に指定され、その中でも特に重要なものが「特別名勝」に指定される。他に、動物、植物、地質鉱物などが指定される「天然記念物」と「特別天然記念物」もある。つまり、特別史跡、特別名勝、特別天然記念物はそれぞれ、国宝と同等と言える存在であるわけである。

毛越寺のように特別史跡でかつ特別名勝なのは、全国でも九箇所のみで、東北にあるのは毛越寺だけである。他に二重指定されているところでは有名ところは、京都の金閣、銀閣、広島島の厳島神社などがある。

毛越寺の特別史跡としての名称は「毛越寺境内附（つけたり）鎮守社跡」、特別名勝の名称は「毛越寺庭園」である。名称から分かる通り、特別名勝としては毛越寺が世界に誇る、平安時代の浄土庭園が指定されている一方、特別史跡としてはその浄土庭園を含む毛越寺の境内、そしてそれに付随するものとして（附（つけたり）、「鎮守社跡」も併せて指定されている。

特別史跡としての毛越寺を語る際、この「附鎮守社跡」があまりにも見過ごされ過ぎていてはないだろうか。毛越寺の境内は散策する人は多くても、鎮守社跡のことを気に留める

人はほとんどいないだろう。毛越寺を訪れる人の目当てはこの世界遺産に登録された浄土庭園であつて、「附」の後の鎮守社跡などは大部分の人にとっては眼中にないに違いない。

そして、もし仮にこの「附鎮守社跡」という文言に気づいた人がそれを探してみても、毛越寺の境内の中には一切見つからないのである。それもそのはず、これらの「附鎮守社跡」は、いわゆる飛地区域として指定されている、実はいずれも現在の毛越寺の外に存在しているのである。

毛越寺境内と一緒に特別史跡に指定されている「附鎮守社跡」は9つもある。その内訳は、特別史跡に記載されている順に、①護摩堂跡、②文殊堂跡、③吉祥堂跡、④北野天神社、⑤日吉白山社、⑥花館廃寺、⑦王子社跡、⑧八坂神社、⑨観自在王院跡である。これらのうち、⑨観自在王院跡は、世界遺産に登録された文化遺産の一つなので著名だが、それ以外の八つを知っていたり見たことがあつたりする人はとても少ないのではないだろうか。だからこそ逆に回り甲斐があるのである。

されたのは一九七九年で、毛越寺が指定された時期（史跡が一九二二年、特別史跡が一九五二年）よりも意外に新しいことが分かる。

指定の理由として、「古代末期における奥州藤原氏の東北地方の経営を考える上で欠かせない大きな意味をもつ中尊寺の歴史的意義にかんがみ、これを特別史跡に指定する。なお、この特別史跡には中尊寺の瓦を生産したと考えられる瓦窯跡（鈴沢瓦窯跡）も組み入れることとする」とあり、中尊寺の境内の他に瓦窯跡も一緒に特別史跡に指定されたことが分かるが、それ以外にも毛越寺の「附鎮守社跡」と同様に飛地指定区域があるということはほとんど知られていない。こちらの飛地指定区域はその瓦窯跡も含めて七か所あり、①伝鈴木三郎重家松跡、②伝亀井六郎重清松跡、③伝増尾十郎兼房松跡、④伝開伽堂跡、⑤伝熊野堂跡、⑥伝弁慶墓、⑦瓦窯跡である。

世界遺産に登録されたのは、特別史跡としての中尊寺のうち、境内にある金色堂（国宝）、金色堂覆堂（重要文化財）、経蔵（重要文化財）、大池伽藍跡（特別史跡）のみで、ここに挙げた七つの飛地指定区域は含まれていない。従つて、これら七つのことを知っていたり見たことがあつたりする人はやはりほとんどいないのではないだろうか。唯一、⑥弁慶墓は、中尊寺の前の道路に面した目立

つ場所にあるので知っている人はいるかもしれない。

関係人口を「関係ない人口」にしないために

さすがに世界遺産の五か所に加えて、これら毛越寺と中尊寺の飛地指定区域を全て巡ることは難しい。だからこそ、平泉はもう一度来る場所になるのである。最初は世界遺産を巡り、次はそれ以外の場所をのんびり散策してみる。そうすることで平泉はまた人が来てくれる場所になる。

人口減少時代を迎え、関係人口の重要性が取り沙汰されているが、一回だけ来てあとは来ない人のことは関係人口とは言わない。それは「関係ない人口」か、せいぜい「ちよつとだけ関係した人口」である。平泉を何回も人が訪れる場所にするためには、世界遺産以外の遺産をどう活かすかが鍵となるに違いない。

今準備を進めているガイドブックではその世界遺産以外の遺産をここに挙げた以外にも私の知っている限りたくさん紹介したいと考えている。毛越寺の附鎮守

社跡も中尊寺境内の飛地指定区域も、平泉関連のガイドブックには全く登場せず、行つてみたいと思つても、そもそもどこにあるのか分からないという人も多いはずである。それらの場所もしつかり明記するので、どうか気長に待つていただきた

い。

写真は、毛越寺の附鎮守社跡には含まれないが、平泉に九つあつたとされる鎮守社の一つ、北野天神社である。これも最初どこにあるのかまったく見当がつかず、途方に暮れていたところ、通り掛かつた高齢の御婦人がどうされたんですか」と声を掛けてくださった。実は北野天神社を探しているのですが見つからなくて」とお話し

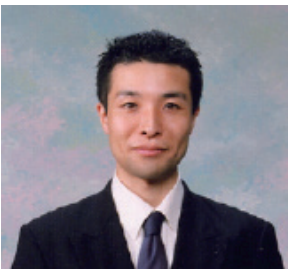
た。その方はその場所をご存じて、ご親切にも私を案内して連れていってくださり、それでようやくたどり着けたという経緯があつた。

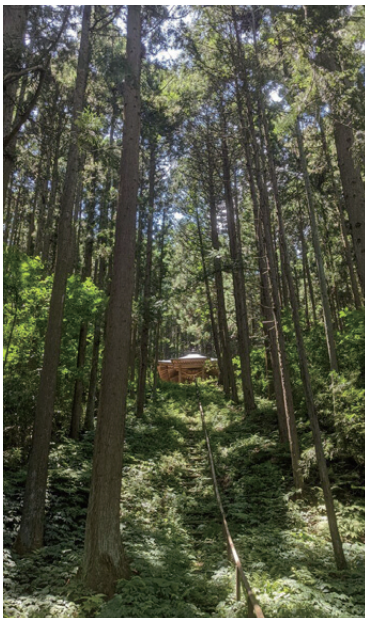
地元の人たちの中には、世界遺産以外の遺産も今もしつかり息づいていることが分かつた出来事であつた。

執筆者紹介

大友浩平
（おおともこうへい）
奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。
「東北ブログ」
http://blog.livedoor.jp/anagma5/

F a c e b o o k
https://www.facebook.com/kouhei.ootomo





匿われた「禁教」の花咲く街 東北を変え、変わりゆく信仰の事

その昔、私が三十歳を過ぎた頃に所謂「ケルト文化圏」を旅するのだと言つて英国周辺を歩き回った際、つくづく驚嘆したのが行く先々のキリスト教会の建造物であった。当時ワーキングホリデーで在英中の友人が地下の食堂で働いていたロンドンの聖ポール大聖堂や、かの古代遺跡ストーンヘンジ近くの町に聳えるソールズベリ大聖堂の巨大さを皮切りに、アイルランド・ダブリンの聖パトリック大聖堂、スコットランドのグラスゴー大聖堂は内部も観覧し、日本の伝統的宗教とは全く違う形で、信仰イメージの具現化の壮大さに圧倒されたのである。



奥羽越現像氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、全国の旅の末、仙台に移住。どの本屋に入っても、とりあえず郷土本の棚に向かつて立ち読みを始める東北好きである。

た頃の私は母も愛好していた神田駿河台のニコライ堂こと東京復活大聖堂ぐらゐしか知らず、キリスト教にもさほど関心が向かなかつたが、仙台に移住し日々の街歩きや仕事で中心街、即ち旧城下町を移動中、日常的にかなりの数のキリスト教会の建物を通り過ぎている事に気づいた―近所の北仙台カトリック教会を始め、行きつけの喫茶店・星港夜、近くのホサナ教会、そこから遠からずのパブテスト教会、定禅寺通の日本聖公会東北教区、かつての遊廓街による風紀の悪化防止の為建てられたという東六番丁教会、カトリック元寺小路教会にハリストス正教会、更には結婚式用のチャペルながら英国から移築した本物の教会建築であるという聖ジョージ教会まで―実のところ、キリスト教施設が多い地域としては無論巨大都市大阪や東京始め、長崎や沖縄、兵庫など西日本寄りとの事で特段仙台に多いという訳ではないだろうが、旧城下での建築集中度は高く、同様に街中に散在しているはずの神社・仏閣に比較すると瀟洒な佇まいは近代的な民家やビル群の中に自然に溶け込みモダン都市仙台のイメージに一役買っている感すらある。

本稿では仙台・宮城にて

多彩なる人々が守り繋いできたキリスト教に焦点を当てながら、極東の島国にて信仰を越えた心の拠り所、幸福の表現となった西欧宗教の姿を追つてみたい。

※

結婚式用のチャペルと前述した通り、結婚式と教会は日本では分かちがたく結びついている感があるが、そう言えば過去、冬の仙台風物詩・光のページェントの時期に定禅寺通りを歩いていたら、日本聖公会の前で女性の前に跪き求婚を成功させた男性に出喰わして周囲の通行人皆で拍手を送つたような事があつた。仏閣は葬式の色合いが強く、神社は厳かな儀礼のイメージが濃いのに對して教会には信仰を越えて華やかに、自由により幸福を表現できる印象があると言える。

かつては、巷によく「自分は仏教徒だから、クリスマスを祝ったり、馬鹿騒ぎしたりはしない」という主張が聞かれたが、これについても近年変化が感じられる事も含め、一考しておきたい。この主張自体使い古された冗談か言い訳のような側面があつたが、最近聞かれなくなったのには事実厳密な意味での「仏教徒」が少なくなつてきた事に加え、且つ日本で仏教徒である事がクリスマス祝つた理由にはならない、という認識が広がつてきた状況があるように思われるのである。

そもそも、仏教徒と言えども寺院の檀家として従うのみで「仏の教え」を真に理解する者は多くない。また、日本では古の国策によつて古来からの信仰即ちアニミズム的信仰の流れを汲む神道との融合が図られた―神仏習合である。その際重要なのが「権現」という概念で、日本古来の八百万と表現される神々は、諸仏が変身した姿なのだという便利な解釈法であつた。この考え方に依拠すればイエスであろうがアツラーであろうが同じ理屈で日本に取り込まれるという事になるが、実際のキリスト教伝来の時代、このような事があつたという―宣教師が「信じれば天国へ行ける」と語つたところ、市井の人に「親や先祖はキリストを知らずに死んだが、彼らは天国へ行けたか」と問われ、否と答えると「では信じられない」と返されたというのだ。これは日本古来の祖霊信仰への無理解から来る失敗だが、実際八百万の神の国とは言えども、新たな一神教の上陸はそう簡単にはいかなかった。

ルによる宣教活動として知られるところだろう。実際この頃から少なからぬ日本人がキリスト教に魅了され、帰依したのは何故だったか―八百万の神の国だったから？いや、恐らくは、国が興つて権力者に翻弄されるようになってから、人々はその地に象徴的人物・伊達政宗がいた・・そこが「隠れキリシタン」の聖地となる事も自然な成り行きであつたろうか。

政宗といえば、最終的には徳川の命に従ひ棄教に応じない領民を厳刑に処したが、過去藩内で洋式帆船を製造、欧州との独自の交渉を試みさせた支倉常長やローマ法王庁にその名が記録される篤志家・後藤寿庵ら優れた功績を持つキリシタンの家臣らの処遇にも最大限の配慮をし特別に布教を認めてほしいと家康に駆けあつたとも言われ、当時の日本国中ではギリギリまでキリスト教を許容する地として仙台藩はあつた。しかし中でも政宗のキリスト教関連の事柄として、その実の長女である五郎八姫の存在は外せない。

正室・愛姫との間の待望の第一子として京に生まれた五郎八姫は幼くして徳川家康の六男・忠輝との縁談が決まり嫁入り直前に政は娘を仙台へ引き入れた。孟蘭盆の夜、仙台城の展望台である「懸造」から五郎八姫が城下町を見下ろすと、そこには父・政宗が領民に命じ街中に点させた灯りが広がり、その中に城下の中心交差点・芭蕉の辻が作り出す巨大な十字の光が認められたという―これはその母・愛姫が在京の頃にキリスト教を信仰していた事、その隠れ屋敷があつたとされる仙台城下より西部の栗生の地に残る複数の堂にキリスト教を匂わせる木像や祭礼が見られる事、また夫・忠輝の改易から離縁させられた後に再婚を勧めても終生頑なに拒否し続けた事などから、五郎八姫もまた隠れキリシタンであつたという可能性を裏付けるエピソードでもあるのだ。

徳川時代から近代となりキリスト教にとつて新たな幕開けとなるが、実は宮城県における近代キリスト教普及には、日本人初のロシア正教会司祭となつた元土佐藩士・澤辺琢磨が関与していた。かの坂本龍馬の従兄弟に当たり、江戸で剣術修行中に切腹沙汰のトラブルに見舞われ、龍馬らの助けを得て江戸を脱出。箱館（後の函館）に渡り当地神明社の婿養子となりながら後にニコライ堂を建てるニコライ神父の教義に心服して改宗するというスキャンダルで東北に逃亡・流浪するなど困窮するが、後にニコライ招集の会議で日本人初の司祭に選任される。ともに洗礼を受けた仙台藩栗原出身の医師である友人・酒井篤礼や、箱館戦争に参加中であつた仙台藩士・金成善左衛門及び新井常之助ら琢磨に影響を受けた有志



仙台・定禅寺通の日本聖公会
クリスマスの夜

のかも知れない。

※

仙台の友人に、敬虔なクリスチャンの女性がいて、キリスト教的世界観を見事に表現する画家として活動している。やはりその物語の豊饒さ、壮大さと明快さがキリスト教の大きな魅力―かの熱烈な日蓮宗徒でありながら『銀河鉄道の夜』にて南十字を描いた宮澤賢治もまた、その物語性に魅かれたのか。あるいは、宗教に救いを求める人の少なくなる未来、キリスト教があるためこの国の八百万の神の概念に取り込まれ、死を悼む仏閣、祈願を捧げる神社に對して、クリスマスや結婚式といった、喜びや幸福を表す地位を獲得する―そんな時代を予見したのだろうか。

死後の世界も、神の真実の姿もわからない。ならば各々自由に想像し、その神の姿を愛すべし。アジール東北に育まれたキリスト教の未来もきつと果てしなく人々を刺激し自由である。



シオカラトンボ



ダケカンバの老木



セマダラコガネ

シリーズ 遠野の自然
「遠野の小暑」
遠野 1000 景より

いまは暦では「小暑」だが、気候は「小暑」を一通り越して「大暑」である。大変な暑さの到来で、連日のように熱中症のニュースで大騒ぎである。今年六月中旬から夏日の日数が急に増加し、六月中



雨上がりのサルナシ



ナツグミ

の夏日は気象統計開始以来最高ということであった。また、例年だと五月末から七月中旬頃までは梅雨の最中なのに、早々と梅雨明け宣言をした地域も多かった。そのために従来からの季節感が乱れてしまった。

近年は温暖化が叫ばれているが、今年の変化は温暖化どころか熱帯化ではないかとも思えるほどで、このまま続くと大変だ。徹底的な原因追及が待たれる。



ホタルガ



還御



タヌキ

シリーズ【東北を再発見する旅】…②0「磐神社」（アラハバキ神社④）

安倍氏信仰のアラハバキ神社と言われている（岩手県奥州市）



磐神社全景



磐神社由来看板



ご神体の巨石



巨石ズームアップ

磐（いわ）神社参拝

岩手県の奥州市にある磐（いわ）神社参拝も、いまから五年前の年明け早々に急に思い立って敢行した岩手県の巨石巡り取材のなかのひとつだった。

磐神社は、奥州市衣川区の平泉駅の北西、直線五キロの場所で、広い田園の中にポツンと社があるのだが、もっと山深い場所にあるものとはばかり思っていた筆者にとつては拍子抜けしたロケーションだった。

小さな山門から田んぼの中を一本のびている狭い砂利道がどうやら参道代わりのようで、軽トラ一台がやっと通れる道幅だった。もちろんすれ違うことはできないのでレンタカーで境内脇に乗り入れるときは少しドキドキした。

また、正面からみると何

の変哲もない普通の神社であるが、拝殿裏に回ると、磐神社のご身体、東西十・二メートル、南北八・八メートル、高さ四・二メートルの自然石が突如出現する。神社入口正面から視覚に入る拝殿の普通つぼさと、拝殿裏のご神体の巨大さのアンバランスが何ともいえない印象を刻み込む。

それもそのはずというベ

氏とは当社を「荒覇吐神（アラハバキ）」として祀ったらしい。磐井以南に威を振るう拠点をこの地に形成したと伝えられる。」と書かれている。

安倍氏とは、周知のように、平安時代の陸奥国（後の陸中国）の豪族である。その安倍氏が「荒覇吐神（アラハバキ）」を信仰したというところで、この神社も「荒覇吐神（アラハバキ）」に

「荒覇吐神（アラハバキ）」とい

はいつたいどんな神で、どんな信仰なのかは依然ナゾのままである。

かなり古くから信仰されてきたらしく、蝦夷土着の神であるらしいが、正体は不明で、さまざまな性格を背負われている神である。また、「荒覇吐神（アラハ

バキ）」信仰を調べているときどき「瀬織津姫命」という名前の神に遭遇する時がある。この「瀬織津姫命」もナゾの神である。

となると、時の中央政府に滅ぼされた蝦夷の人々↓安倍氏↓巨岩の御神体↓アラハバキ神↓「瀬織津姫命」、と隠れた一本の歴史線が浮かんたりするが確証はない。

巨石信仰つながり

磐神社のご神体も巨石であるが、当新聞百五十六号で取り上げた「丹内山神社」も、磐神社と同じ「アラハバキ神」が御祭神であり、ご神体も巨大な自然石であることを思い出して欲しい。

宮城県にあった「アラハバキ神」に関係する神社には巨石はなかったが、岩手県では共通しているようだ。

ひょっとして、この巨石信仰は「アラハバキ神」の正体を暴くヒントになるの

だろうか？大いに興味のかき立てられるところである。

安倍氏の館は分らなかった

同じく、由緒看板の「当社の右前方には安倍館があり」とあったので、せっかくだからと安倍館を探したが、道路に案内板はあれど、それらしき建物に至る道も、建物もその痕跡も見つかることはできなかった。近くで工事をしていた人に聞いても分からなかった。まことに残念だった。

地元民に安倍一族は尊敬されていないのだろうかと思

う。

ある松山寺境内の女石神社と合わせて、日本武尊と稲葉姫命陰陽の二神を祀るのだという。

その松山寺の女石も何とか探し当てた。

女石は男石に比べると大きさはかなり小さい。

筆者としては、陰陽二神の話は少し疑わしいと感じた。

故安倍首相と磐神社

そういえば、この磐神社には故安倍首相に関する話もあることを付記しておく。いうまでもなく、故安倍晋三氏は総理大臣として通算在任日数三二八日と憲政史上最長を記録したのだが、その故安倍氏が磐神社を信仰したという話があるのだ。故安倍晋三氏の本籍地は山口県だが、ご自分の先祖は東北の俘囚（ふしゅう）長・安倍氏だと信じていたとい

う。

「俘囚」とは、中央政府に制圧され従った蝦夷の人々をさし、安倍一族はその長だったが前九年の役で滅ぼされてしまったのだが、その子孫が故安倍晋三氏であるという話も興味深い。実際には、多忙な安倍晋

三元首相がこの神社を訪れたことはないが、代わりに、実弟の岸信夫氏が参拝に訪れていたとも言われていて、故安倍氏のこの磐神社への厚い信仰心とその原動力となっていたのではないかと

写真でお伝えする「二刀流復活の大谷選手の活躍」

＊以下の写真はすべて NHK 地上波 1 チャンネル TV 画面を筆者が撮影したもの



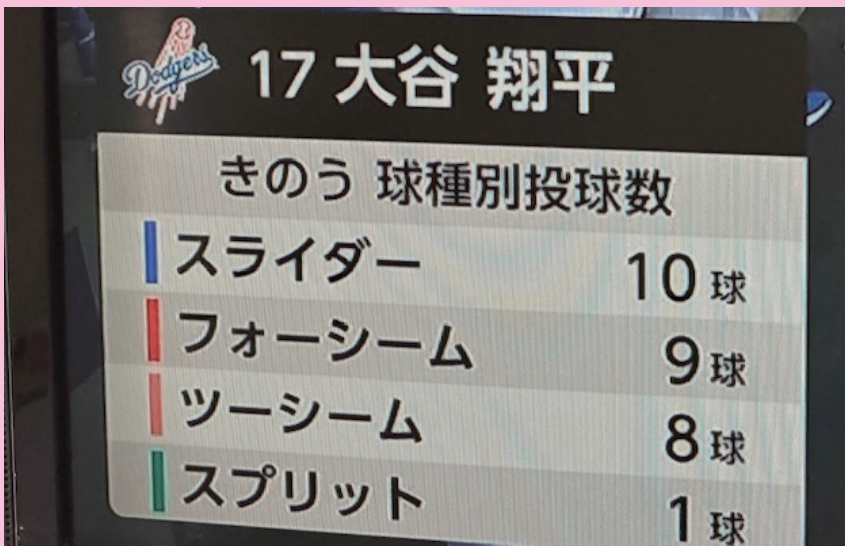
二刀流復活初戦の投球・・・パドレス 1 番打者との対戦



二刀流復活初戦で投球後にベンチに戻らず打撃の準備をする大谷選手



二刀流復活初戦の投球成績とインタビュー



二刀流復活初戦の 28 球の球種



二刀流復活初戦の打撃成績とインタビュー



二刀流復活初戦のタイムリーヒットの瞬間



二刀流復活帰戦の 3 日後のパドレス戦で背中にデッドボールを受けたが味方の “乱闘” 突入を防いだ



デッドボールを受けた後にパドレスの選手と “緊張解除” の握手